五業つ子

世界遺産特別号
—発行日—
2018.08.09
—編集—
長崎工業高校新聞部
—発行—
長崎工業高校新聞部
号外

世界遺産となった長崎と天草の潜伏キリシタン関連遺産

守り抜き、今も生きる
人々の思いの強さを知る

七月十五日、長崎と天草の潜伏キリシタン関連遺産取材会が行われました。本校からは二名が参加。潜伏キリシタンと関係がある教会や文学館四か所を回り、関係者やガイドの方から話を伺いました。

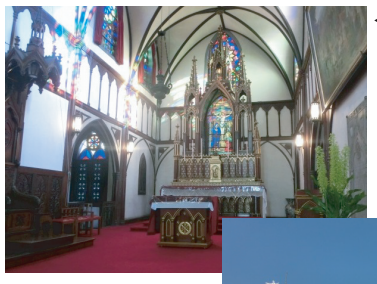
潜伏の終結 宣教師との接触
大浦天主堂

一八六五年に潜伏キリシタン一人が大浦天主堂を訪ね、外国人宣教師プティジャン神父に自分がキリシタンであることを告白しました。大浦天主堂は日本のキリスト教徒の潜伏が終わった場所となると同時に、信徒発見の場所となりました。

一八六四年に幕末の開国に伴い、在留外国人のために建てられた大浦天主堂。まだ江戸幕府による二百年以上続く禁教令中であり、そのような中キリシタンが存在し続けていたこと、そして名乗りをあげたこの行為は、世界の宗教の中でも類を見ない大変珍しいこととして知られています。

大浦天主堂は日本で一番古いキリスト教建造物です。レンガ造りの教会で、二度の改築を経て今の姿となっています。外観は建てられた当時と比べ多少変化したものの、内部空間はそのままの状態で保たれています。堂内はランプが多く設置された明るい内観で窓に配置されたステンドグラスの美しさが印象的でした。心落ち着く雰囲気があり、自ずと神聖さを感じさせるような場所でした。普段は撮影禁止の大浦天主堂内部。右の写真は貴重な一枚です。

▲信徒発見の場


◀神秘的な堂内（大浦天主堂）

信徒の思いが形となった 二つの教会
大野教会・出津教会

長崎市内から北へ車で約一時間半。西彼杵半島西部東シナ海に面した所にある外海地区。山からすぐに海といった平地の少ないところです。江戸時代、多くのキリシタンがここに身を潜め、信仰守り続けていました。弾圧が厳しくなると、ここから東シナ海を渡り、五島列島へ向かったキリシタンも多くいたとのこと。信徒発見後の一八六五年、出津を訪れたプティジャン神父は信徒たちの祈りの言葉や動作が完璧であること驚き、出津の信徒たちは待ち望んだ神父の来訪を喜んだそうです。一八七九年「ド・ロ様」の名で私達も知っているド・ロ神父がフランスから外海地区に赴任。出津教会の建築が始まり、一八八二年に完成。当時の信徒は六百五十人だったそうです。教会は台風などに備え天井が低めに造られ、1.5階程の高さですが。中は思ったよりも奥行きがあり、落ち着いた雰囲気だという印象を受けました。

もう一つド・ロ神父によって建てられたのが大野教会（一八九三年）。出津教会よりもさらに山奥の方に建てられています。大野教会は、フランスの建築模式が用いられた石造りで、教会近くの大野岳でとれる玄武岩を漆喰モルタルで固めています（通称「ド・ロ壁」）。

大浦天主堂は今日もキリシタンの方々の心の拠り所となっています。（中野）

▲山の中にある大野教会

守り継いできた歴史が形となった出津教会▶

▲鐘塔の上のマリア像（出津教会）

改めて知る 地元の歴史

私は今まで地元でのキリシタンの出来事をあまり知りませんでした。が、今回の催しで、その過去を知ることができて、とても興味深く取材をすることができました。

最初に訪れた大野教会堂では、今から百二十年以上前にド・ロ神父と日本のキリシタン達が大野岳の石を使いフランスの建築様式で教会を建てたことを聞き、百二十年以上も前の日本人が異国の建築様式で教会を建てたことの大変さを感じました。そして、それまで表向きは仏教徒として振舞いながら潜伏していたこともガイドの方の説明で知ることができました。キリスト教徒でありながら仏教徒のふりをしなければならなかった潜伏キリシタンの苦悩を考えさせられました。

次に訪れた出津教会堂では、完成当時、出津教会だけでも六百五十人の信徒がいたことを知り、教会がその人の達の心の拠り所になったことがわかりました。そして、その篤い信仰があったからこそ、出津教会は今でも信者の方の日常の中にあり、祈りの場所となっていました。

遠藤周作文学館では、まず館内から見える五島灘の景色の美しさに感動し、展示されていた作品からは「日本人とキリスト教」について深く考えさせられました。

最後に訪れた大浦天主堂は、市内で身近にある教会です。実は私は訪れるのは初めてで、新鮮でした。堂内は祭壇をはじめ神聖な雰囲気があり、「信徒発見」の歴史の重みがありました。

私は今回の取材会を通して、知らなかったキリシタンのことをたくさん学ぶと同時に、地元にもまだまだすごい歴史があることを知りました。自分の住んでいる街、長崎について見直すことができるいい機会となりました。（横田）

自由に、でもマナーを守って
ガイドさんに聞きました

▶ガイドしてくださった高橋さん

出津教会を訪れたときにガイドをしてくださった高橋さん。多くの人に説明をする際に意識していることは何かを伺うと「特に意識していることはない。誰でも自由に、マナーを守りながら歴史についてもっても知ってもらえればそれでいいと思う」と話してくれました。

マナーを守りながら場の雰囲気を感じて建物としてだけでない教会の存在について知ってほしいとのこと。大事なことを聞いた気がしました。

高橋さん、ありがとうございました。

関心を持ち 正しく伝えて
取材陣にインタビュー

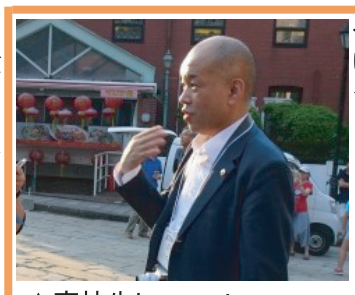
取材に来ていた記者の小池真一さんと工藤恵さん（共同通信社）、布谷真基さん（西日本新聞社）に話を伺いました。

①長崎についての印象
②高校生に対して期待していること

◆小池真一さん
①新しい事に優しい町。
取り入れる力がある。
②大人が気づかない視点で物事を捉えるところがすごい。見る力、鋭さをもっと身に付けてほしい。

◆工藤恵さん
①カステラや坂が多いことで有名。
②物事に興味や関心を持って、正しい情報を伝えてほしい。

◆布谷真基さん
①地元だけれど取材をして初めて知ることもあるくらい歴史のある町。
②関心を持ち行動を起こしてほしい。
指摘してくださったことをしっかりと受けとめ、物事に取り組もうと思います。ご協力頂きありがとうございました。


▲高校生にエール

生涯信仰について考えた
遠藤周作文学館

遠藤周作文学館は二〇〇〇年五月に開館。外のテラスから見える海が印象的です。

キリスト教の信者でもあった遠藤周作は「日本人とキリスト教」をテーマに人の本質を探究し、数々の作品を残しました。特に、ハリウッドで映画化された「沈黙」は日本が禁教時代に入るころを題材としたもので、文学館にはその生原稿が展示されています。

教会の他にもド・ロ神父は孤児院や救助院などを建て、地域の生活をより良くしようと尽くしてたため信徒たちは敬意を込めて「ド・ロ様」と呼ぶようになりました。神父の建てた建築物は素朴なものが多いですが、この日も観光客が訪れていました。

どちらの教会も今でも結婚式やキリストの言葉を後世に伝える「ミサ」の会場となっています。（中野）

▲見渡せる綺麗な景色

編集後記

今回は潜伏キリシタン号。初めはミニとして発行する予定でしたが上手く収まりきれず、いつものハーフサイズ（？）に。締め切りに間に合うようにと慌てて編集したせいか、課題に追われる夏休み後半のような気分になりました。あー、きつかった。